

平成30年度リレー講座「歴史・文化・自然」
再発見講座【後期】
日時：平成30年12月11日(火)14:00～15:00
場所：パレオ10階 第7会議室

善三先生再解釈



坂本善三美術館 学芸員
山下 弘子氏



受講生の皆さん



坂本善三(さかもと ぜんぞう 1911年-1987年 76歳熊本市で没)；日本の洋画家で「グレーの画家」「東洋の寡黙」と呼ばれ、グレーと黒を主体とした独自の抽象画は、東洋の寡黙、沈黙の錬金術などとも評される。亡くなるまで熊本で制作を続け、故郷の風土、自然に根ざした作品は、日本独自の抽象であると世界でも高い評価を受け、美術界に大きな足跡を残した。



●坂本善三美術館収蔵品について

熊本県阿蘇郡小国町にある坂本善三美術館は、築約140年の古民家を移築して1995年に開館、善三の作品などを含めて約1300点の収蔵品があり、テーマを変えて年間5～6回の展覧会を企画、開催(23年間で91回)。善三作品の特徴は、(1)作品の多様さ(①具象から抽象へ、②油彩・水彩・水墨・版画)、(2)作品の普遍性(①時代を超えた普遍性、②柔軟性・包容力)がある。善三の主な作品として「形」/「連帯」/「構成」/「灰色の中の青」/「城」などがある。

●善三先生再解釈<コレクション・リーディング>

美術館のこれら収蔵品を活かし続けていくための工夫が必要と考え、ジャンルを超えた様々なゲストを招き、収蔵品が次世代までいきいきと受け継がれていくよう、従来の概念にとらわれない自由な発想で作品や美術館を活用しながら、多様で普遍性のある善三作品を再解釈する展覧会シリーズを企画、開催。第一回は「小国お宝博覧会」、第二回は「こんな解釈、ありなんだ!」、第三回は「拍手し展」。

●小国お宝博覧会(第一回)；地域のお宝(防空頭巾/真空管ラジオ/昔描いた自身の絵画/貴重な古い写真/勲章/骨董品など様々で、それぞれ小国の方たちの思い出やエピソードがあり町民の皆さんから出品された多種多様なお宝と、小国町のお宝である善三作品を組み合わせて展示。“違和感なく並んでいるさまはとてもユニークで面白い。ちょっと心がほっこりするようない展示だった。アートは身近なところにある…”(あるツイッターより)

●[こんな解釈、ありなんだ!](第二回)；藤浩志と「小国び塾」メンバーがアートプロジェクトに取り組み善三作品を塾生それぞれが解釈して形にした展覧会で、そのなかから幾つかの作品を紹介すると、善三最後の作品といわれる「水墨抽象(絶筆)」から発想し、もし絶筆を描くとするれば何を描くかを切り口に、身近な人たちからも集めたいろんな「絶筆」を布に描いて服に仕立て善三の「水墨抽象(絶筆)」と並べて展示、また、善三の新聞連載小説「山童閑遊」挿絵下絵に登場するユーモラスな生き物たち(猿が体操したり猫がのんびりしてたりおじさんが酔っ払ってたりなど)が今にも動き出しそうなを、映像にして文字通り「動かした」作品や、善三の作品「炎」から発想し、お化けという形にして生まれ変わらせようとした作品展示、さらに、善三作品「白い空間」とお弁当屋さんが毎日卵焼きを作りながら、人々の卵焼きへの思い出やエピソードを集めていっしょに展示した作品などがある。



●「んまっポーズと作る善三展」拍手し展(第三回)；んまっポーズという名前は、逆に読むとスポーツマンで、身体能力抜群の元教育学部体育学科の男性たちが組む創作ダンサーチーム。絵だって拍手をもらいたい(んじゃない?)！<拍手し展(はくしゅしてん)>は小国のことばで、“拍手してごらん”の意味。ダンスや音楽を鑑賞したときはみんな拍手するのに、展示された絵を見て拍手することは殆どありません。きっと絵画鑑賞でも、拍手したいくらい心が動くことはあるだろうに。或るダンサーたちは、善三先生の作品も拍手喝采されるべきだと考え、「拍手し展!」が開催された。異ジャンルのゲストが善三美術館の収蔵品を再解釈するべく、ダンスを切り口に善三作品を解きほぐした。小国町の人々から、善三作品を見て思いつく体の動きをダンサーたちが採集し、それをもとにダンス作品を制作、展示会場で善三作品とともに映像を展示した。「絵を見る」という行為は、静かに脳内で完結するものと思いがちだが、心の動きは本当はずっとアクティブで、時には爆発的に、時にはひっそりと、時には柔らかく、時にはずっしりと体をも動かそうとしているのではないだろうか。いつもは絵の前に静かにたたずむあなたの体もこの展覧会では思わずびくりと動いてしまうかも！もしそんな絵に出会えたらぜひ拍手を送ってあげてください…(展覧会ポスターから抜粋)というそんな変わった展覧会を紹介。



まず、小国町の人たち(役場の人たち/杖立温泉/地元の農家/鎌ヶ滝/地元の中学生たちなど)が善三作品を見てイメージしたキーワードをダンサーたちが採集し、それらをもとにして考えた体の動きをダンス作品に作り上げ、美術館内の展示会場で善三作品とともに(ダンス)映像を展示・実演した。善三作品の(水墨)抽象画/「対」(リトグラフィ)/「黒の構成」/「集」/「絶筆」などからイメージされた、“魚びちびち”“羽ひらひら”“子牛モウモウ”“杉木立”“滝”“雷に撃たれた”“ヤッホー”“杖立川の流れ”“温泉にはいる”“からだに迷路”“石垣”“によるよる”“山並み”“絶筆”などそれぞれを動きにしてダンスを創作し、善三作品とともに表現、展示した。



●展覧会の意義!

- ① 地域の人々がアーティストとともに収蔵品(坂本善三作品)を読み直す展覧会で、アーティストたちとの交流により自由な見方、素直な感想、喜びを感じ、それをダンサーと体で表現することで、見方、感想が想像/創造へと変化した。
- ② 収蔵品(坂本善三作品)が時代を超えて新たな価値を生み出し続けるための展覧会で、現代の私たちのリアルな感想と作品が結びつくことで作品が新たな側面をもって輝きはじめる、思いもよらない新しい価値が生み出される。
- ③ 収蔵品を通して様々な人たちの想像力を共有しあえる展覧会で、普通の誰かの想像力は別の誰かの想像力を刺激する力をもつ。自分とは異なる想像力で表現されたものを見聞き、共有することは、人間の根源的な喜びであり、希望へとつながる。

受講生の感想(アンケートから抜粋)

- ・名画を題材にダンスで表現することに使うのは大変おもしろいと思います。楽しく受講でき有難うございました。
- ・水墨画のもつ美しい線は、(できたら)女性が(ダンスで)表現したらもっとよいのではと思いました。
- ・善三先生の作品を通して、地域のひとや様々な人たちといっしょに、作品自体が生き続け、成長し続けているのだと思いました。これからも是非このような活動を続けていって欲しいと感じました。
- ・このような企画を実現するのに、そのもととなる具体案を考える人の発想がすごいと思います。創造的で、楽しく有意義なことだと思います。善三先生の絵の見方を教えていただき、大変興味深いお話でした。
- ・このような催し(展覧会)は、新しい発見があって楽しそう。善三美術館にまた行ってみたいくなりました。



取材を終えて；ダンスと絵画を同時に楽しみながら拍手喝采する(善三先生もびっくり!)という斬新な試みに関心しながら講演を聞き終わりました。今回は皆さんのご協力を得て無事終了し、有難うございました。

(くまもと県民レジャーズ広報ボランティア HK作成)

